

仲保者の仲介

アウグスティヌス『教師論』における信仰と理性⁽¹⁾

ルイス・マッキー

翻訳＝浅野幸治・茶谷直人

こうして見過ごされるのが何かと言えば、表現（記号）は現前（実在）に対して後から到来するのではないという事実、即ち表現は現前の経験の条件そのものとして、また欲望、享樂の条件そのものとして現前の中に住まっているという事実である。

デリダ『根源の彼方に』⁽²⁾

『教師論』の中程を開いてみる。すると第一〇章で、アウグスティヌスはそれまでの議論の結論として「何ものも記号を用いないでは教えられない」と述べている。しかし数ページ後には、問題をより注意深く考察すれば「何ものも記号によっては学ばれない」ことが解るだろうと述べている⁽³⁾。

この二つの主張からは、「何ものも記号を用いないでは教えられないが、何ものも記号によっては学ばれない」というパラドックスが生じる。これはプラトン著『メノン』のパラドックスと同種のものであることが容易に認められるが、記号と意味の二元性を抛り所になっている。存在論的にも認識論的にも、記号と意味の間にはある隔たりがあって両者を引き離している。記号は意味ではないし、記号の意味は決して記号そのものには含まれていない（備わっても秘められてもいない）。従ってすべての記号は解釈を要するが、正しい解釈は予め意味を知っていて初めて可能であろうから、最終的には記号そのものからは何も学ばれない。しかし、もう一方のアウグスティヌスの主張「何ものも記号を用いないでは教えられない」は、我々が記号を通してしか実在を知ることができないことを示している。どうやら我々は、実在を記号を通して学ばねばならずしかも記号は実在に頼らずしては解釈できないという状況にあるようだ。

以上がパラドックスである。アウグスティヌスは、このパラドックスの解決には我々の内なる唯一の教師キリストの助けを必要とすると考える。『教師論』という題名は、そこでの議論を踏まえて考えれば、我々がこの書をキリスト論として読むことを促している——即ち、魂の内に宿り我々に実在を示して記号を解釈できるようにしてくれるのは「神の不変の力、永遠の知恵」（一章三八節）キリストなのである。記号そのものは、感動詞「ほら」のようなものに過ぎない（一〇章三四、三五節）。記号は確かに、既に知られた事物を我々に想起させたり気付かせたり注意を向けさせたりする。しかし、内的人間の内に宿って我々にそれらの事物とそれらがいかに意味されるかを教えてくれる唯一の教師は、神の知恵キリストである。

『教師論』における記号のパラドックスとその解決を検討すること、これが拙論の狙いである。

1 記号のパラドックス

記号と意味

第八章の中でアウグスティヌスは、記号間の複雑な相互関係を論じた後、記号が事物を意味する仕方について考察する。そしてこの連関で、指示の曖昧さに触れる。例えば、記号がどのような場合に事物を指示し（「人間」が理性的動物を表し）どのような場合に他の記号を指示し（「言葉」が言葉一般を表し）どのような場合に自分自身を指示する（「言葉」が「言葉」という言葉を表す）のかは、必ずしも明らかではない。この点を説明するためアウグスティヌスは、アデオダトスに「人間は人間か」と問う（八章二二節）。この問いには様々な意味がありうる。

「人間」という二字の言葉は「人間」という二字の言葉か。理性的動物は理性的動物か。理性的動物は「人間」という二字の言葉か。「人間」という二字の言葉は理性的動物か。そのような言葉が持つ指示の曖昧さは、もし整理されなければあらゆる種類の混乱の原因になりうる。その曖昧さ故に、アデオダトスが「人間」という

二字の言葉だという結論も示唆されるのである——もちろんこの結論はアデオダトスに強く拒否される。

アウグスティヌスによれば、通常そのような曖昧さを取り除いて意志疎通に混乱が生じないようにしてくれるのは「理性の法則」である（八章二四節）。即ち、

「記号だけが論じられていることが文脈から明らかな場合以外は、言葉は事物を指示するために用いられていると仮定せよ」という法則である。我々は通常、特に考えることもなくこの法則に従っている。しかしこの法則には二つの欠陥がある。第一にこの法則は、言葉が指示する事物が何であるかを教えてくれないし、この法則だけでは意味のパラドックスが解決されない。第二にこの法則には例外がありえて、この法則に従って立てられた仮定が間違っている場合がありうる。文脈から誤解が生じる場合、文脈の意味が誤解される場合、文脈が予告なしに変わる場合、

「理性の法則」に従って誤ることもある。もちろん言葉の通常の用法およびその通常理解は理性の法則によって解釈できるけれども、「理性の法則」は言葉の意味を最終的に決定するものではない。この法則は、アウグスティヌスの表現を幾つか挙げれば、「精神に与えられた」法則、「話すことの規則」、「自然的に非常に強力な」法則である（八章二四節）。しかし、その強力さと（一見したところ明白な）先天性にも拘わらず、この法則は究極的・絶対的規則というようなものではなく、「特別なことがない限り、記号は事物を指示すると仮定せよ」という単に便利な——ひょっとしたら不可欠かもしれないが——経験則に過ぎない。

次の第九章でアウグスティヌスは、彼らしい議論の進め方をする。上下関係の一例を素描し、それが依って立つ原則を述べる。その原則とは「理性の法則」についての議論が既に示唆していたものであるが、「他の何かのために存在するものはその何かよりも価値が低い」ということである。換言すると、目的は手段よりも上位の価値を持つ。この原則によって、記号はその用途（教えること、祈ることなど）や意味されるものの知識よりも価値が低いということが確立できる。

記号がいつでも意味されるもの（そのもの）より価値が低いということは、明ら

かなことではない。例えば「汚物（コエヌム）」という言葉は、汚物そのものより価値が低くはない。逆に「コエヌム」という言葉は「コエルム（天）」に音がよく似ていて聞いてよい感じがするのに対し、汚物そのものはほとんど天とは正反対であり人に嫌悪感を抱かせる。しかし、だからと言って今述べられた上下関係の原則に例外ができる訳ではない。というのは正確に言うと、記号（「汚物」）はそれが意味する事物（汚物）のために存在するというのではないからである。記号は、それが意味する事物の知識を可能にするために存在し、従って常にその知識よりも価値が低い。汚物そのものではなく汚物の知識が、その知識をもたらす言葉（「汚物」）よりも上位の価値を持つのである。

記号の不可欠性

第十章において『教師論』の中心問題——記号のパラドックス——が正式に述べられ、論じられる。

何ものも記号を用いないでは教えられない。直示的定義はこの規則の例外と思われるかもしれないが、そうではない。誰かに「犬」という言葉の説明を求められた時、私がそれに答えて傍らの犬を指さすとしよう。しかし、犬を指さすことは複雑な記号であり、説明を求めた人はまずこの記号を解釈しなければならない——さもなければ答えを手に入れることができない。実例によって説明する場合も同様である。「語ること」の説明を求められて私が二、三の言葉を口にしたり、「歩くこと」の定義を求められて、二、三歩足を踏み出すとしよう。しかし、説明を求めた人は、二、三の言葉を口にするという私の行為を、語ることの一般的本性を表す記号として解釈しなければならない——そうでなければ、「語ること」とは特定の言葉を私が今朗読していることを意味するのだと勘違いすることもありうる。また二、三歩足を踏み出すという私の行為を、歩くとはどういうことかを示す記号として解釈するのでなければ、「歩くこと」が私の特定の行為を意味すると考えることもありうる。つまり何かを口にすることで「語ること」を定義し、少し歩くことで

「歩くこと」を定義するというのは、ポチを示したり指したりして「犬」を定義するのと変わらないのである。例は記号であり、記号として認知され然るべく解釈されないならば、例としての目的を果たさず大変な混乱が生じる。従って一般に、何ものも記号を用いないでは教えられ得ない。

記号の非十全性

しかし同時に、何ものも記号によっては学ばれない。一つには、単に見るだけで多くの事物について学び得ることは明らかだと思われる。例えば多くの木を——一人で、誰にも訊かず手引書もなしに——見るだけで、木について様々なことを学べるだろう。こうした事例は、それをどう説明するにしても（アウグスティヌスはそうした事例が一見したところよりずっと複雑だと考えているようである）⁽⁴⁾、記号の仲介がなくても何かを学び得ることを示唆している。しかし決定的に重要な点は、すべての記号は解釈を必要とし解釈なしには記号から何も学び得ないが、意味される事物を知っていなければ記号の正しい解釈はできないということである。我々が記号から学ぶかに見えることも実際には記号から学んでいるのではなく、故に記号は我々に何も教えないのである。

「というのも私に記号が示された場合、記号が意味する事物を私が知らなければその記号は私に何も教えないし、知っていればいたで、何を私はその記号から学ぶというのか。（中略）従って、記号が与えられた後に事物そのものが学ばれるというよりむしろ、事物が認識された後で記号が学ばれるのだ。」（一〇章三三節）

実在の知識の由来

意味されるものが予め知られていなければ、記号は記号として認知され得ないし、ましてや正しい解釈もされ得ない。記号が我々に実在を教えるのではなく、実在についての知識が記号の解釈に指針を与えるのである。では実在についての知識はどこからやってくるのか。アウグスティヌスは次のように述べる。

「言葉に帰することができるのはせいぜい、我々が事物を求めるよう注意を促すのに役立つということだけであり、言葉は我々に事物を明示して教えてくれる訳ではない。しかし、私が知りたいと願っているものを私の目や他の感覚器官や更には精神そのものに指し示す人は、私に何かを教えている。従って、我々が言葉によって学ぶのは言葉だけ、より適切に言えば言葉の音や響きだけなのだ——というのも（中略）たとえ私が何か言葉を聞いても、それが意味する事物を知っていないと、それが言葉だということも私には解らないから。だから言葉の認識は（その言葉が意味する）事物を知ることによって成立し、言葉を聞くだけでは言葉は学ばれないのだ。（中略）実際、言葉が発せられたときに我々はその意味しているものを知っているか知らないかのどちらかであるということは、実に理にかなった真実なことだ。即ち、知っている場合には我々は学ぶというより想起するのであるし、知らない場合には想起さえしない——ただし探究するように促されはする。」（一章三六節）

私の教師とは私に記号を与えてくれる人ではなく、実在を教えてくれる人である。というのも我々は記号が意味する実在をまず知らなければ、記号が記号だということも、ましてやその意味も知り得ないからである。記号は言わば備忘録であり、我々が既に記号を用いずに学んだものを思い出させてくれるに過ぎない。

では、我々の教師は誰なのか。イエス自身が福音書記者を通して「あなたがたの教師はキリスト一人だけである」と言われた⁽⁵⁾。アウグスティヌスにとって、これは次のことを意味する。

「しかし我々は、我々が理解する全ての事柄について、言葉を発する人ではなく——恐らくは言葉に促されて——精神そのものの内で精神を支配する真理に教えを乞う。そして教えを乞われたこの真理こそが教師である。というのもこれこそが内的人間に住むと言われるキリスト（神の不変の力、永遠の知恵）であり、実際すべての理性的魂がこの教師に教えを乞うのだから。」（十一章三八節）

我々の教師は真理そのものであり、真理は、我々が記号を正しく用い解釈できるよ

う事物をあるがままに示すことで、我々の精神を支配する。そして真理とはキリスト（神の言葉、神の知恵）のことを言う。キリストは、外的に記号によって語りかけるのではなく内的に魂に自らを啓示することで、万人にあらゆる事物を明示してみせるのである。

「我々が精神即ち知性や理性によって認識する対象について議論する時、実のところそこで議論されているのは、いわゆる「内なる人」を照らした喜びで満たすあの真理の内的な光の中で我々が直接に見る事物である。しかしその際我々の議論の聴き手も、内奥の澄みきった目をもってそうした事物を見るとすれば、私が語ることを彼自身の知性の働きによって知るのであって、私の言葉によってではない。だから私は、真理を語る時でさえ、それを見てとる人に教えているのではない——その人は私の言葉によってではなく、神がその人の魂の内に啓示する事物そのものによって教えられるのだから。」（一二章四〇節）

これには少し制限が必要である。魂に宿るロゴスは（我々の側の努力なしに）誰にでもすべてを啓示する訳ではない。

「人には、それぞれの意志の善し悪しに応じてつかみ得る限りの事柄が啓示される。そして、時に欺かれることがあっても、それは教えを乞われた真理の側の欠陥に由来するのではない。ちょうど身体が目が見えれば欺かれるのは、外界にある光——目に見えるものについて我々が（各自の認識能力に応じて事物を示してもらおうべく）教えを乞うことを認めているあの外界の光——の欠陥ではないのと同じように。」（一章三八節）

真理の光に十分に照らされない人がいるとすれば、それは知的能力の不足故であって、光そのものに責任があるのではない。太陽は万人に万物を等しく照らす。けれどもかすみ目の人や不注意な人は、よく目の見える人や注意深い人よりもずっと不正確にしかものを見ない。真理のあやまりなき規範は存在する——即ちキリストである。しかしその規範を把握する側の人間はあやまりなき者ではあり得ない。だから我々は、真理そのものに教えられていても誤る。我々の教師に教えを乞わなかつ

たり我々の教師を十分に理解しなかつたりするが故に（かつその限りにおいて）我々は誤るのである。

信仰の必要性（有益性）

このこと——真理の光の中でのものを見る能力や意志の不十分さ——の故に、我々には信仰が必要である。アウグスティヌスが信仰の働きについて述べた部分は、『教師論』の議論にとって必要不可欠である。

聖アウグスティヌスが神の照明について説明する途中で、『エフェソの信徒への手紙』三章十六節と十七節が暗に言及されている（一章三八節）。そこで聖パウロは信仰によってキリストは心のうちに宿り人に神の知識を授ける、と述べている。アウグスティヌスにとっては、「信仰によって」という言葉が重要である。アウグスティヌスは、神の知識が他のあらゆる知識の成立条件であると確信した我々の注意力と理解力の限界を知るが故に、信仰は有益かつ必要であると主張するのである。

信仰が有益であるのは、信仰によって記号から実在へと——前もって実在を理解していなくても——進み行けるからである。信仰のこうした導きにより、実在の理解が可能になる。アウグスティヌスは、その語るところによれば、ハナンヤ、アザルヤ、ミシャエルの話信じること『ダニエル書』の重要な一節の意味を理解できるようになった（一章三七節）⁽⁶⁾。同様に、イエスの言葉を信じること弟子はどんな事柄（言葉ではなく）を祈るべきかを理解した（一章二節）⁽⁷⁾。

信仰は記号から実在へという動きである。例えばある人を知っていれば、私はその人の肖像画も知るようになる。私はその絵を当人の肖像画として認知するだろうし、その絵は本人（実在）を表すもの（記号）として十分だと——本人を知っているのだから——判定できるだろう。しかしもし肖像画しか見ておらず本人を知らないとすれば、私はその絵が肖像画であり本人を然るべく表しているとただ信じるしかない。

「信仰は理解へと導く」というアウグスティヌスの主張を理解する上で我々は、アウグスティヌスの考える「理解」とは常に霊的で知的な実在に関わることを念頭に置く必要がある。物的な被造物は全て霊的なものの記号であり、霊的なもののみが厳密な意味の「実在」である。実在のみが厳密な意味で知られ得るのであり、また信仰が有益であるのは、物的な記号の把握から霊的な実在の理解へ我々が進み行けるようにしてくれるからである。結局のところ、我々の知り得ることは神および天上の実在のみである。聖書の言葉を信じることで我々は歴史に親しむが、我々が理解するのはその歴史が象徴する王国の神秘である⁽⁸⁾。アウグスティヌスも、信じることによってシャドラク、メシャク、アベド・ネゴといった大昔の個人ではなく、彼らの物語の意味を理解するようになった。そしてイエスを信じることによって弟子たちも、主の祈りをどう唱えるかではなくどういう霊的な恵みを神に願えばよいかを理解した。

こういう意味で、つまり（物的な記号を）信じれば人は（記号が意味する知的な実在を）理解し得るという意味で、信仰は有益である。しかし信仰は単に有益なだけではなく、事前に知識を持たない場合には絶対不可欠である。信じなければ理解はあり得ない⁽⁹⁾。理解がない時、信仰を拒否することは身体的感覚に与えられた霊的真理の唯一のしるしを捨てることであり、従って知識の可能性を自ら閉ざすことである。神の言葉は内的人間に宿って魂に実在を教えるが、神の言葉が魂に入るのは、人が世界における言葉の受肉（キリスト）という記号を信じることによってのみである。アウグスティヌスは次のように語る。

「だから、精神によって認識されるものの場合それを認識できない人は、それを認識した人の言葉を聞いても無駄なのである——但しそのようなものの場合、知らない間でも信じることは有益である、という点は別にして。しかし、霊的・知的な実在を認識することのできる人は誰でも、内的には真理の学徒であり、外的には語り手を、あるいはむしろ語り手の言葉を判定できる。」（一三章四一節）⁽¹⁰⁾

我々の教師は真理そのものであり、魂の内に宿り我々に知的な実在を明示してくれるキリストである。しかし我々がこの真理へと近づき得るのは、真理の記号を信じることによつてのみであり、信仰によつて我々は真理が啓示する実在を理解できるようになる。聖アウグスティヌスは、自説を要約し聖書解釈との関連を強調しつつ、次のように結論を述べる。

「学徒と呼ばれる人は、真実が語られているかどうかを自身の内奥で——もちろんあの内なる真理に自分の能力に応じて目を向けながら——考察する。このようにして学徒は学ぶ。（中略）だから今や我々も、教師は天にいます教師ただ一人であるが故に地上の者を教師と呼ぶべきではないということが神的權威に基づいて書かれた真理であることを、単に信じるだけでなく理解し始めることができる。「天にいます」という言葉が何を意味するかはかの唯一の教師が教えてくれる。我々は、人間を通じ記号によつて外的に注意を喚起されて、内的に教師に向かうことによつて学ぶのだ。そしてその教師を知り愛することは幸いであり、誰もがそれを求めるけれども、実際にそれを得て喜ぶことのできる人は非常に少ない。」（一四章四五、四六節）

照明と信仰の働き

我々の議論は「何ものも記号を用いないでは教えられないが、何ものも記号によつては学ばれない」というパラドックスから始まった。このパラドックスは、記号とそれが意味する実在との間に存在論的・認識論的隔たりがあつて両者を引き離していることから生じる。そしてこの隔たりは、内的に関連し合う二通りの仕方で埋められる。まずは実在の側からである。神の知恵そのものが、魂の内に宿る言葉という形を取つて、精神を知的な実在と真理の規範についての知識で照らす。指示の曖昧さをなくすのに役立つ「理性の法則」、および記号の方が記号の仲介によつて得られる知識よりも価値が低いという規則は、この真理という守護者が魂の内にあることのしるしである。通常「神的照明説」と呼ばれるこの考えは、プラトンの「想起説」から輪廻転生の神話を除いたものに他ならない。即ちアウグスティヌス

は、プラトンの『メノン』の中で提出される仮設的結論——知識はすべて想起であり、我々はどんな事柄も決して初めて学ぶのではなく、いつでも既に知っている事柄を思い出すに過ぎないという主張——を肯定するのである。

記号の側からは、信仰によって記号と実在の間の溝が埋められる。我々は記号（例えば聖書の言葉）を信じることで、魂の内にキリストを迎え入れる。そしてキリストの与える記号（例えば「理性の法則」）を信じることで、キリストの照明を得て実在を認識し得る。アウグスティヌスの教説におけるこの側面、即ち信仰の勧めは、特別にキリスト教的な側面であり、アウグスティヌスのプラトン主義を彼独自のものになっている点である。

こうして記号のパラドックスは弁証法へと形を変える。即ち何ものも記号によっては学ばれず、神的照明——真理がいつでも既に我々の精神にあること——がなければ、どんな記号も意味することができず無意味である。しかし同時に、何ものも記号を用いないでは教えられず、記号および記号の促しに応じる信仰の仲介がなければ、我々は精神を真理の光に開いて実在を理解することができない。

「この人を見よ」

先の引用箇所にすぐ続いて、『教師論』の終わり際に、アウグスティヌスはアデオダトスに次のように語りかける。

「それでは次に、私のこの長い議論について君がどう思うかを言ってもらいたい。もし君が私の語ったことが正しいと解るなら、個々の点について私から質問された場合「その点なら解っています」と言っただろう。だから君は一連の事柄を誰から学んだのかを理解しているはずだ。確かに私からではない——私に質問された場合君は自分で正しい答えを出しただろうから。けれども、もし君が私の語ったことが正しいと解らないのであれば、かの内なる人も私も君に教えなかったのだ——私はそもそも教え得ないし、内なる人が教えなかったのは君にまだ学ぶ力がないからだ。」（一四章四六節）

信仰と神的照明の相互依存性を繰り返すこれらの言葉を聞いてアデオダトスは、いわば「論より証拠」ということを実感する。しかしそうすると『教師論』の議論は議論の正しさを鮮やかに実証していると思われるかもしれないが、そうではない。むしろ『教師論』は、スタンリー・フィッシュが「自己滅却的作品 (self-consuming artifact)」と呼んだものになっている⁽¹¹⁾。アウグスティヌスが右の言葉を息子アデオダトスに語る時の笑みを想像してみたい。信仰が理解の条件であり（我々には学ぶ力があるのだろうか？）、謙虚な人にのみ可能である⁽¹²⁾（神の言葉が肉にまで降りたように、我々は記号にまでへりくだれるだろうか？）ことを思い起こせば、我々は信じる者の謙遜がある種の穏やかな皮肉であることに気づく。言うまでもなく、信じる者の謙遜は信念の控えめな表現であり、「控えめな表現」というのが「皮肉」の主要な意味の一つだからである。

アウグスティヌスが——自己矛盾すべきでないとすれば必然的に——自説を控えめに述べていることは、十分明らかであろう。第八章でアウグスティヌスは、あらゆる記号の曖昧さを説明する代表例として「人間 (homo)」という言葉を選ぶ。後に第一〇章では、あらゆる記号の働きを理解させてくれる典型的な言葉として「見よ (ecce)」という言葉を手挙げる。二つが合わさると「この人を見よ (Ecce homo!)」となる。この文は最初にポンティオ・ピラトが——ある種の皮肉を込めて——口にしたのであり⁽¹³⁾、ピラトは真理その人を目のあたりにして疑い深く「真理とは何か」と訊ねたとされる⁽¹⁴⁾。

この最高のめぐり合わせは、キリスト教的修辞学の創始者アウグスティヌスによるからには偶然ではあり得ない。聖アウグスティヌスによれば、『教師論』は息子アデオダトスが十六歳で洗礼を受けた時に息子と交した対話を記録したものである⁽¹⁵⁾。つまりアウグスティヌスは、息子の人生のこの大きな節目（永遠の命に必須の入信式の日）に、信仰を受け入れたばかりの息子にキリスト教の真理の正しい理解について教えている。父が息子に——包み隠さず時間をかけ議論を尽くして——語るのは、「私はおまえに教え得ない、神のみが教え得る」ということである。し

かし父が息子に——さりげなく遠回しに、そして謙虚にピラトとは逆の皮肉を込めて——実際に語っているのは、「この人を見よ」ということである。最終的にアウグスティヌスは——自分の主張する真理を嘘に変えるべきでないとするば——教師としての職務と特権を放棄しなければならない。そして信仰深い真の父として、息子を信仰の道に沿って、（道であり真理であり）真に教師と呼ばれる唯一の神（父にして子）へと導かねばならない。

2 信仰と理性の弁証法

信仰と理性の相補性

アウグスティヌスにとって信仰と理性の関係は弁証法的である。信仰と理性——正確には理性的思考を可能にする神的照明——とは、不可分である。両者は互いに依存し合い、支え合う。どちらももう一方との関係を離れては把握され得ない。聖アウグスティヌスは聖書学史上最も幸運な誤訳を引用して、「信じなければ理解はあり得ない」と主張する。即ち、信じるという行為が予めあってそれによって力を与えられるのでなければ、理解を得ることはできない。しかしアウグスティヌスは「理解しなければ信仰はあり得ない」とも主張する。即ち、知性の照明が予めあってそれに教わるのでなければ、信じるという行為はあり得ない。というのも、まったく理解していないことを信じても無意味だからである⁽¹⁶⁾。信仰なき理解は空虚であり、理解なき信仰は暗愚である。

認識とは、照明と信仰のこの弁証法に尽きる。神的照明によって魂は知る力を、事物は知られる力を与えられる。そして信仰によって魂は、実際に知性の力を使って事物の本性を知ることができるようになる。

プラトンは真理を希求する人間のエロス、即ち神的なものと合一しようとする魂の生得的な彼岸的衝動を賞賛した。聖アウグスティヌスの受肉説的キリスト教は、エロスに先立つものとして神的アガペー、即ち人間のエロスを呼び覚まし上昇させ

る神の此岸的衝動を措定する。そして神のこの受肉的力によって信仰——アガペーに対するエロスの応答——は、単なる劣った意識形態（プラトンの言う「信念」や「思惑」）から理解の必要条件に引き上げられる。

アウグスティヌスの思索は常にこの循環の内部で動く。真理そのものである神についての知識が、あらゆる学習の場合に前提となる。しかし神を知るためには、有限にしてあやまりやすい人間の精神は神への経路を与えられる必要がある。この経路即ち信仰の可能性は、神自身の受肉において与えられている。受肉した言葉（キリスト）を信じることから我々は神の理解へと進み行き、神についての理解が深まるにつれて我々自身やその他の被造物についての知識も深まる。神自身が可能にしてくれる信仰によって我々は、神についての知識——即ち他のあらゆる理解の成立条件——へと少しずつ近づいていく。信仰の謙虚さによって新プラトン主義はグノーシス派的高慢への誘惑から救われ、信仰を通して得られる理解によって新アカデメイア派のプラトン主義は懐疑的絶望への誘惑から救われる。アウグスティヌスにとって、哲学とはプラトン主義を意味する。そしてアウグスティヌスにとってキリスト教とは、他の著作と同様『教師論』においても、哲学の贖いであり完成である(17)。

弁証法的関係の不安定性

但しここで言われる贖いについては更に考察が必要である。アウグスティヌスによれば、信仰と理性の弁証法は、旅人である我々の人生においては果てしなく続くが、受肉した言葉——真理であり且つ道であるキリスト——の内で一種の結末に到達する。この結末はどの程度強固なのだろうか。

アウグスティヌスの弁証法は多くの誘惑にさらされている。第一に、弁証法を解体しようとする誘惑がある——即ち信仰と理性の二極性を二元性に解体し、両者が本質的に別々であり、仮に（友好的または敵対的な）関係があっても偶然的関係に過ぎないと考えるのである。また、信仰を劣った形態の知識と定義しようとする誘

惑もある。即ち、より深い理解に達するための手段ではあるが理解が達成されれば廃棄できるものとして、信仰はその自律性を奪われ、未熟または不完全な認識に還元されるのである。そしてもちろん、還元を逆方向に向けようとする誘惑もある——即ち信仰に特権を与え、理性には信仰への道を解明したり擁護したり準備したりする従属的役割を担わせるのである。

これらの誘惑のどれもが、神学の内部でも外部でも再三にわたって抗し難い魅力を発揮してきた。いかにその例が多いかは、例を一覧にすれば、容易に示せるだろう。しかしこのあやまりの一覧表よりは、何故信仰と理解の弁証法はこれらの誘惑に絶えずさらされているのかという問いの方が興味深い。一つの明白な答えは、「弁証法的関係はそもそも不安定であり安定化を求める」というものであろう。弁証法的関係を単なる区別に変えるのが安定化の一つの方法である——そうすれば弁証法の二項（信仰と理解）が完全に切り離され、両者は無関係となって運動を停止する。それがマニ教の取った道であり、（周知のように）アウグスティヌスは回心後も相当の間その魅力に引かれ続けた。もう一つの方法は弁証法的関係を、理解か信仰かいずれかが他方を支配する上下関係に作り変えることである——一つはグノーシス主義の誘惑であり、もう一つは信仰主義的懐疑主義の誘惑である。

このような分析は無意味ではないだろう。しかしこうした明白な（また幾分繰り返しの）説明を持ち出すよりも、私は『教師論』の対話そのものに即して問題を更に考察したいと思う。

『教師論』前半部が示唆する問題

ここまでの論述では私は『教師論』の半分——全一四章中の最初の七～八章——をまったく扱ってこなかった。それは、アウグスティヌスの忠告に従ったことである。『教師論』は、指示についての厄介な問題を提起することで始まる。最初の方（二章三節）でアウグスティヌスは、ウェルギリウスの『アイネーイス』から詩の一行（第二巻六五九行）を引用する。

「もし、その大いなる都から何も残らないことを神々がお望みならば…
…」 (Si nihil ex tanta superis placet urbe relinqui . . .)

このラテン語の詩行を分析してアウグスティヌスは、それを構成する八つの言葉の内では通常の意味ではっきりと何かを「指示」するものは一つもないことを指摘する。二つの名詞 (“superis” および “urbe”) でさえも異教徒の存在しない神と破壊された都市を追想しただけのもので何も指示していないし、動詞 (“placet” および “relinqui”) と前置詞 (“ex”) と接続詞 (“si”) ももちろん同様である——しかし特に重要なのは「無」を意味する “nihil” という言葉である。一体「無」が何を指示し得ようか。けれども『アイネーイス』の文脈の中でこの詩行は、ラテン語を読める人なら完全に理解できるし、アデオダトスも苦もなくこの詩行を解釈する(18)。それにも拘わらずアウグスティヌスは、アデオダトスの解釈に次のように意見を述べる。

「しかし君は、自分が言葉を言葉によって、記号を記号によって、周知の記号を同じく周知の別の記号によって説明していることに容易に気づくはずだ。しかし私が君にできれば示して欲しいのは、記号が意味する実在そのものなのだ。」 (二章四節)

この発言でアウグスティヌスが言いたいのは、アデオダトスは実在を明示することによって言葉を説明することはできず、語の辞書的な定義を繰り返して既知の実在をほのめかすことしかできない、ということである。既に父の問いに慣れたアデオダトスは、次のように鋭く切り返す。

「討論では言葉を用いて答える他ないので、私達が現に討論をしている限り私の答えはあなたの望む通りにはなり得ません——このことあなたには気づかれない (もしくはそのふりをしておられる) のでしょうか。あなたは (中略) 実在を求めておられ、しかもあなた自身も言葉を用いて私に尋ねておいでです。ですからはじめにあなたの方で言葉を用いずに尋ねてください——そうすれば私も同じ仕方で答えましょう。」 (三章五節)

ここの修辞法は、『教師論』の議論が後で示すことになる「人間は記号が究極的に意図している実在を人に教えることができない」という命題を予告している。アウグスティヌスの答えは、「君の言うことは正しいと認めよう」（三章五節）である。

しかし『教師論』の対話は更に数章にわたって、記号相互の関係——その中には記号がその記号自身を表す場合もあれば、他の記号を表す場合も実在を表す場合もある——についての精査を続ける。（『教師論』の）後半部になってようやく、予め実在について知らなければそれを表す記号は理解され得ないということが述べられる。従って、後半部でこのことが解るまでは、前半部で議論される指示の曖昧さの問題は解決されない。そしてアウグスティヌスは、前半部の分析を、後半部の議論の実質的な厳密さと強い喜びに備えるための一種の準備体操と見なすよう我々に促す。つまり、次のように前半部の議論を締めくくる。

「とはいえもし至福の生が存在すると私が考え、そのような生へと神の導き、即ち真理そのものによって我々の弱さにふさわしい仕方で段階的に導かれることを私が望んでいるとすれば、記号が意味する実在そのものではなく記号を考察して私がそのような道に踏み出したことは滑稽と見えるかもしれない。しかしこの準備段階を大目に見て欲しい——というのもそれは遊びのためではなく精神の力とまなざしを訓練するためなのだから、しかもその精神の力とまなざしによって我々は、至福の生がある領域の暖かさと光に耐え得るのみならず、その暖かさと光を愛し得るのだから。」
(八章二一節)

一連の議論について言われるこういった言葉が示唆するのは、我々は他ならぬ霊的闘争に備えるために知的訓練に耐えるべきだということである。恐らくアウグスティヌスは我々がそうするよう望んでいる。

しかしアウグスティヌスのこうした消極的評価（皮肉なのだろうか？）にも拘わらず、恐らく我々は『教師論』の前半部についてももう少し注意すべきである。つま

り分析の詳細というよりもむしろ分析が示唆すること、即ち分析が切り開く可能性（それを後半部が閉ざそうと試みる）についてである。

『教師論』の前半部で表面化する厄介な事実は、言葉は事物を表すと考えられており普通はそれに成功しているが、時として単に別の言葉を表すだけだ、ということである。例えば「言葉」という言葉は、それ自身（「言葉」という言葉）を含めた全ての言葉を表す。この事実から、結局のところあらゆる記号は別の記号を意味するという連鎖を果てしなく続けるだけで、記号によって伝達可能な超越的実在が存在しないのではないか、という疑念が起こる。各記号の本性は他のすべての記号と如何に異なるかによって決まり⁽¹⁹⁾、記号が記号以外に何も表さないとすれば、意味するもの（ここからは記号を“signifiers”と呼ぶことが必要である）の体系全体が果てしない自己指示の循環であり、それが完結して超越的な実在が意味されることは決してない。「意味作用」など起こらないのである。

記号の介在

アウグスティヌスはこの可能性を拒否する。その理由は、この可能性に含まれる懐疑が耐え難い重圧をもたらすからだけではない——より重要なのは、そうした懐疑は余りに徹底的過ぎて「名づける」ことさえできないからである。名前を与えたとしても、名づけるべき対象を確定して捕まえることはできず、対象を先送りするだけであろう。この事態を避けるため、アウグスティヌスはすべての記号の根拠を、人間の言葉を通じて語られる神の言葉に求める。しかしこの解決法は問題をより深刻にする。というのも、ロゴスとそれについての我々の理解との結び付きは、予め解体されているからである。一にして永遠なる神の言葉と人間の断片的ではかない言葉との隔たりが、両者の関係を考えられないものにする——つまりその関係に名前を与えても、両者の差異を繰り返し、再会を無期限に遅らせるだけである。信仰と理性の弁証法は単に脆いだけでなく、いつでも既に壊れているのである。

記号は意味されるもの（the signified）の現前を仲介するために存在するが、そ

の仲介によって、意味されるものの不在が可能になる。表現（記号）は現前の条件であると同時に腐敗でもある。果てしなく自己指示を繰り返して、記号はその意味を延ばし延ばしにする。意味されるものに付け加わってそれにとって代わる記号は、現前を歪め押し退けて回復不可能にする。以上の理由で、この（意味の）後退を阻止するために、アウグスティヌスは信仰の必要性を繰り返し説く。信仰とは、意味される実在を知らない時に、それを知るまで、完全に言語を超えた次元で記号を信じることを意味する。聖書の極めて逆説的な言葉で言えば、信仰は見えない事柄のあかし（それが見えること）であり、ただ望まれただけの事柄の現実性（真の現前）である⁽²⁰⁾。つまり、信仰とは現前していないものの実在性（現われ）なのだ。信じる者は記号が印す意味の不在に自らを賭け、信仰の固さが、そこにはないものの真実を確証する。信仰は原理的信頼であり、それに対立するのが全面的懷疑であるが、どちらも記号の曖昧な性格によって可能である。しかし信頼と懷疑の違いは、論理で処理できる概念的違いではない。そうではなく、記号への信頼と記号に対する懷疑はそれぞれ、知的活動の「媒体」である言語という同じ問題の二面、肯定的側面と否定的側面である。信頼と懷疑の違いおよび関係は、論理的問題ではなく論理そのものの問題である。信頼と懷疑はどちらも、言語——これは指示と疎外の非体系に他ならない——の本質的可能性であり、言語はその本性からして完結し得ないのである。

アウグスティヌスは、信仰を勧めればそれで記号の問題が解決する訳ではないことを承知していた。もし仮に信仰が純粹かつ直接的、即ち純粹な帰依心の発露、神への一途な信頼であったとすれば、問題は解決できただろう。というよりもむしろ問題など最初から存在しなかつただろう。しかしアウグスティヌスの時代にはもう手遅れである。否、如何なる時も既に手遅れである。信仰はいつでも既に信仰の問題となっているのであり、記号の弁証法は、それを解決するはずの媒体の中で繰り返される。問題の解決法そのものの内で同じ問題が生じるのだ。信仰が問題となっている（そして信仰は常に問題である）以上、奇跡でもない限り、回復不可能なま

で我々は直接性・現前を失っている。脱構築の可能性は、ロゴス中心主義のただ中に例のサルトルの虫（や聖書の蛆）の如く、不気味に横たわっている。この可能性は決して消えないのである。

信仰が問題にして解決であることは、次のように表現できよう。記号を記号として立てるのが信仰である。何らかの模様を目にしたたり分節的な音を耳にしたとしよう。如何にして我々は、その模様や音が言語、即ち意味のある記号や音声であることを知るのだろうか。我々は知らない。少なくとも、それを知り得る方法などない。アウグスティヌスは明らかに、言葉の使い方を学ぶことが言葉の意味を理解することとは別であると考えている。従って最終的には、我々は模様や音が記号であることを知らない。我々は模様や音が記号であると仮定する、言い換えればそれらを記号として扱うのだ。そうすることで我々は解釈学的循環に入り、意味の理解が可能になる。

しかし記号の論理は再び動く。記号の曖昧さ（記号は記号以上の実在のしるしであるのだろうか？ ないのだろうか？）は、信仰が記号を記号と見なすことを可能にするが、同時に記号が意味から引き離されることも許す。古代人も知っていたように、複合的なもののみが分解可能であり、そして複合的なものはすべて分解可能である。言語記号は残念ながら複合的である。恐らくは複合性の何たるかを示している。そしてそうした理由で言語には、脱構築的分析の可能性が、言語自体の構造に必然的な脱構築的要素として含まれているのである。

受肉した言葉

記号は脱構築されて、実在（意味）を失うことになる。しかしそれでも受肉した言葉（キリスト）によって問題は完全に解決すると思われるだろう——受肉した言葉は定義からして記号であると同時に記号の意味（記号と実体的に同一の意味）だからである。確かに、聖アウグスティヌスにとって受肉は認識論の中心問題に答えるものである。アウグスティヌスはプラトンと同じく、真理の規範としてのロゴス

と関わることなしに確実な知識などあり得ないことを確信していた。またプラトンの学園から現われた懐疑主義者（新アカデメイア派）と同じく、人間が超越的な言葉を把握し得ないことも確信していた。神の言葉の受肉（キリスト）は、肉的で罪深い我々の精神にも理解できる形での真理の規範である⁽²¹⁾。もちろん、受肉した言葉は我々に、自分の信念の正しさを保証できるような確固とした方法を与えてくれるのではない。受肉した言葉が与えてくれるのは信仰の可能性そのもの、即ち真理は到達可能であり追求する価値があると信じる根拠である。受肉は絶望的な状況に希望を与えてくれる。

受肉した言葉は独特な記号であると言われる。受肉した言葉は我々に、言葉が意味する実在——神（的位格）の一性において言葉と実体的に同一の実在——を直接示す。しかしアウグスティヌスは——そして福音書記者や使徒たちも既に——神の現前が肉的な記号の内に直接認識できる訳ではないことを知っていた。もし認識できたならキリストが否認されることはあり得なかった。キリストは「反対を受けるしるし」であり、キルケゴールの言葉を借りれば「矛盾のしるし」である⁽²²⁾。キリストはすべての記号と同様解釈される必要があるが、どの記号にも増して解釈を拒む。記号のパラドックスが、この何よりも典型的な意味作用（キリストと神との関係）においてさえも繰り返されるのだ。神的照明がなければ神の実在は人間的記号の中に認められ得ないが、信仰がなければ我々は意味するもの（人）から意味されるもの（神）へと到達し得ない。キリスト者が常に知っている（そして常に忘れていく）ように、受肉は何らかの推論の結論ではなく、神の戦略である——つまり我々には、理論の必然的欠陥を補うため多少の実践が必要とされるのである。

見ることが信じることでないように、信じることも見ることではない。受肉した言葉は信仰によって把握され、信仰は定義からして自分の正しさを自分では証明できない。直接的なもの——この場合にはキリストにおける神と人の直接的合一——の知識は、直接的な知識ではない。認識に不可欠の自己意識——自分は知っていること——は、同じく認識に不可欠の直接性を引き裂く。仲保者自身が仲介さ

れるのである。記号（表現）の連鎖は一度始まれば果てしなく続き、解決そのもの内で同じ問題が繰り返される。

脱構築的分析の意義

問題は徹頭徹尾記号に関わる。記号の使用は、脱構築的分析によって問題にされるロゴス中心主義を肯定する。アウグスティヌスの理解では、信仰は記号の一つの使い方である。しかし記号の分析は、記号の使用が呼び起こす現前を際限なく先送りする。アウグスティヌスは記号を使う信仰者であるのみならず記号を分析する哲学者でもあるので、その思想の内には（決して完全には抑えきれない）脱構築的契機がひそんでいる。それ故、アウグスティヌスの神学には懐疑主義とマニ教的要素がつきまとい続けるのである。

信仰と理性が交差する点は、哲学・神学が可能になると同時に根本的に疑わしいものとなる点であり、知性にとってのいわば十字架である。知性は、もし生きようとするならばこの十字架にかからねばならない。神学者や哲学者（ケネス・バークは、形而上学とは小胆な神学に他ならないと述べている）は、自分の営みの分析が常に営みそれ自体を脅かす限り、自分自身が自分にとって最大の敵たらざるを得ない。私の先生の一人（アウグスティヌス主義者）は、神学は宗教的意識における懐疑の契機——信仰と礼拝の中で抑えられていたもの（理性）が再び現われること——であると言った。確かにその通りである。しかし、我々は弁証法的批判のただ中で信仰が絶えず自らを再構成することに驚かされる、ということも事実である。信仰と理性の弁証法は、いつでも既に壊れているが、いつでも再び修復されるのである。

脱構築的分析の重要性は、我々が最も確信に満ちた肯定（信仰の告白）の下に横たわる深淵をまざまざと意識させられるという点にある。しかし脱構築的分析はこうした肯定を否定しない。弁証法のもう一つの契機が再び起こるのである。信仰と虚無主義はどちらも、思考し行為する人間がその本性からして永遠に持つ可能性で

ある。しかし信仰と虚無主義のどちらを選ぶかは、概念的に解決できるような問題ではない。両者は弁証法の中の運動であり、弁証法的な思考は、こういった立場（信仰と虚無主義）を吐き出しながら、同時に吐き出したものすべてを飲み込む。ロゴス中心主義と脱構築の契機は両方とも不可欠であって、一方だけを選ぶことはできない。信仰を告白するためであれ弁証法的に批判するためであれ、我々の用いる（用いざるを得ない）この言語というものの故に、我々はロゴス中心主義と脱構築の両方を（あらゆる動揺を伴いながらも）受け入れざるを得ない。『教師論』の前半部と後半部は、どちらもその意義を失わない。極端な懐疑主義の可能性を封じるのに失敗したことは、『教師論』が神的照明の擁護として成功するための条件であり、信仰の行為としての『教師論』の真正さを記している。

我々は無信仰では生きられない——そこまで皮肉を徹底できる者は誰もいない。しかし同時に、我々は信仰を更に分析せずにはいられない——誰もそれほど単純ではありえないのである。

注

- (1) 本論文は、一九八一年十一月六日～七日にテキサス大学オースチン校で開かれた若手研究者の会主催のシンポジウム「アウグスティヌスと古典的伝統」の席で行った講演に若干の加筆・修正をしたものである。
[訳注] 本翻訳は、『フランシスカン研究 (Franciscan Studies)』第四二巻一九八二年、一三五～一五五頁に掲載されたルイス・マッキー (Louis H. Mackey) の論文 “The Mediator Mediated: Faith and Reason in Augustine’s De Magistro” を訳したものである。但し注の一部を省略して、本文中の見出しを付け加えた。著者のルイス・マッキーは、テキサス大学オースチン校の哲学科教授。
- (2) [訳注] ジャック・デリダ (足立和浩訳) 『根源の彼方に——グラマトロジーについて (下)』現代思潮社、一九七二年、三二三頁。このデリダの文章の訳は、足立訳を参考にした。
- (3) ここに引用した二つの文の出典は、アウグスティヌス『教師論』第一〇章第三一節および第三三節である。以下、『教師論』の参照箇所は章節のみを本文中の括弧内に示す。
[訳注] アウグスティヌスからの引用を訳すに当たっては、茂泉昭男訳『教師』(アウグスティヌス著作集第二巻、教文館、一九七九年)を参考にした。
- (4) この点については二度と取り上げられないが、個々の木を見ただけでは木そのものを学び得ないとアウグスティヌスが考えていることは明らかであろう。仮に実際の木

から学ぼうとすれば、あらゆる木に共通の性質を取り上げ、個々の木に特異な性質は捨象する必要があるだろう。しかしどの対象が木なのかを知るには——つまり自分が何を見、何を捜したらよいのかを知るには——「木とは何か」をまず知っている必要がある。木を木として認知できる場合にのみ個々の木を見て木について学べる訳だが、予め木を知っていないとこうした認知はできないのである。この明らかな循環も、記号と意味の弁証法の一例である。経験された木は、知性により認識される木の記号である。我々は実際の木々（記号）を通してのみ木（意味されるもの）を知ることができるが、木の知識に照らされてのみ、実際の木々を理解できる。ところでこの点に関連して言えば、アウグスティヌスが言葉の意味と用法を区別していることも忘れてはならない。人間は言葉を正しく用いるよう訓練され得るが（アウグスティヌス『告白』第一卷第八章を参照）、それによって言葉の意味を学ぶ訳ではない。意味は「想起（memoria）」にのみ由来する。そして想起（『告白』第十卷を参照）とは、過去に教わるのではなく——教わりたくても過去はもうそこにはない——内的な教師に教わることである。想起とは滅びゆく過去を振り返ることではなく、永遠的なものを頼みとすることである。言葉を用いる能力は、経験的目的のために記号を操る、訓練によって習得される能力である——しかし言葉の意味は、永遠的理性の中にある言葉・意味である。ウイトゲンシュタインが『哲学探究』第一卷第一章を書いた時にこの区別に気付いていたか、定かではない。

- (5) マタイ二三・一〇。
- (6) ダニエル三。
- (7) マタイ六・九～一三。
- (8) 注4を参照。記号と事物の区別についてはアウグスティヌス『キリスト教の教え』第一卷（特に第二～七章）を参照。
- (9) 『七十人訳聖書』イザヤ七・九。
- (10) 記号を信じることで知的な実在の理解へと導かれる過程の好例として、子供による数学の学習が挙げられる。まず最初に子供は教師の権威を受け入れ、教師から数学的真理を表す記号（抽象具象を問わず）を与えられる。そして子供は熱心にりんごやみかんを数えたり、「 $2 \times 2 = 4$ 」「 $2 \times 3 = 6$ 」「 $2 \times 4 = 8$ 」などと九九を丸暗記する。やがて子供は、数学的記号を繰り返し見る内に（誰にもよく解らない内的奇跡によって）数学的原理を理解するようになる。当初不透明な記号の操作であったものが、今や知的な実在の明瞭な把握となり記号そのものが透明になる。アウグスティヌスによれば、このように心の内奥で信仰に応えて内なる教師が、精神を霊的真理で照らすのである。
- (11) Stanley E. Fish, *Self-Consuming Artifacts* 特に第一章。
- (12) 『告白』第七卷第九～一八章。
- (13) ヨハネ一九・五。
- (14) ヨハネ一八・三八。
- (15) 『告白』第九卷第六章。
- (16) アウグスティヌス「説教四三」、「説教一二六」、「手紙一二〇」、「『聖徒の予定』第二章第五節を参照。
- (17) アウグスティヌス『真の宗教』第一～四章を参照。
- (18) ここでのアウグスティヌスの論点は、この一行の意味は各語の指示対象を合わせても得られない、ということだと思われる。言葉の意味は言葉が置かれた行によって決

まり、行の意味は行が置かれた詩の全体から生じる。換言すれば、意味とは文脈によって決まる。これは、言葉に意味（語義）や指示対象があることを否定するものではない。もし言葉に意味（語義）や指示対象がなかったならば、ウェルギリウスは言葉をどう使ったらよいか解らなかつただろう。しかし意味（語義）と指示対象（これは恐らく言葉の使われ方によって決まる）だけでは、行の中での言葉の意味や詩の中での行の意味は説明されない。詩の中にある言葉（または行）は読者にとって出発点であり、そこから始めて作品を構成する他の記号を経て詩の全体および全体的な意味に向かってゆくことができる。逆に言えば、詩の全体は、各部分の意味を解釈するための地平である。詩の部分はすべて、代喩的に全体を表示する記号であり、別言すれば各部分は作品がその全体的意味を具体的鮮明に表現する手段である。この詩行の解釈は、信仰と理解の関係およびアウグスティヌスの世界観全体を象徴的に表している——即ち創造（神の精神にとっては自己を表現する手段であり、我々にとっては神の精神の表現である）は、神の詩であり、そこでは受肉が中心的比喩である。

- (19) ソシュール『一般言語学講義』第二部第三章および第四章を参照。この点については、『教師論』第二章におけるウェルギリウスの詩行の分析でも示唆されている。
- (20) ヘブライー一・一。
- (21) 『キリスト教の教え』第一巻第一〇～一三章。
- (22) ルカ二・三四。キルケゴール『キルケゴール著作集十七 キリスト教の修練』（杉山好訳、白水社、一九六三年）一八三～一八八頁。

(あさの・こうじ 豊田工業大学助教授／

ちやたに・なおと 神戸大学大学院在)

(付記 本翻訳は、新教出版社『福音と世界』1999年6月号、28～45頁で発表したものである。)